

# 東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行・編集：仙台教区サポートセンター  
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12  
仙台教区サポートセンター  
Tel.022-797-6643 Fax022-797-6648  
支援金振替口座：00170-5-95979  
名義：カリタスジャパン  
※通信欄に「東日本大震災」とご明記ください。

東日本大震災により、仙台市のカトリック八木山教会の信徒たちは、自分たちにできることは何かと考え、亘理教会の信徒と協働で、亘理町の仮設住宅に住む津波被災者の方々を訪問し、お茶っこを中心に温かい交流を続けてきました。コロナ後の歩みを始めたオリーブの会の現在の活動をご紹介します。また、石巻、米川などのベース活動を経て、福島県檜葉町に住み、その住民となって多くの方に影響を与えてきた「聖母訪問会」のこれまでの活動を、お二人のシスターのお話を通してお伝えいたします。さらに、もう一つの修道会である「マリアの宣教者フランシスコ修道会」も、借家の解体というやむを得ない事情で亘理を去ることになったことをお知らせいたします。

## コロナ後の歩みと将来への覚悟

オリーブの会 野田 和雄

オリーブの会は津波被災者の孤独に寄り添い、コロナウイルス感染拡大を防止するため、自粛を余儀なくされましたが、その後も歩み続けています。被災者とスタッフの絆は、コロナ禍も乗り越えて、さらに強くなったと感じます。

9月23日、亘理教会聖堂に次々と再会を喜ぶ人々が集まってきます。皆笑顔です。コロナ自粛から再開して4回目ともなると、皆さんマスクや仕切り板にも慣れてきました。参加者（被災者・スタッフ）合わせて30人ほどが集まると、コロナ前と同じ人数に戻っています。

いつものように、亘理教会の長嶋治夫さんの「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」で始まります。被災者の祈る姿は、信徒と区別が付きません。



参加者全員の祈りで始まる

今日の手芸は、「さしこ」のコースター作りです。仙台のボランティア「青い鳥」の墨井豊子さんたちが、サンプルや材料を準備してくださっており、説明して下さいます。作り方や注意点をわかりやすく、教え方も参加者の心に寄り添ってくださっているのを感じます。

参加者は、初めての「さしこ」に戸惑っていましたが、皆さん、手芸のベテランです。コツを覚えると次々に仕上がります。アイロンで布の仕上げを受け持つのは、オリーブの会のベテラン手芸スタッフです。「できた!!」とうれしそうにしている人から、作品を片手に「ハイポーズ」。撮った写真は、次回のオリーブの会で渡します。



男性たちはいつも通りの将棋・囲碁に夢中です。勝負をかけた一手がミス！ 自然に笑い声が広がります。

手芸が終わると、鈴木さんのギター演奏です。歌や食事がともにできない分だけ、ギター演奏へのツッコミも楽しく、皆を笑顔にします。

おみやげは、作ったコースターに、昼食代わりのおにぎり、田園調布教会の信徒が焼いてくださったフルーツケーキ。そして、手芸作品と一緒に撮った写真です。帰って家族と一緒に食べたり、楽しかった思いを分け合う人もいます。



オリーブの会は、亘理・八木山の教会協働で進めてきました。2017年に、全権を亘理教会に移管しました。企画、運営、折衝、資金等、亘理教会が担当しています。コロナ対策のマスク、仕切り板、消毒液、距離を保つ工夫の徹底も、亘理教会が責任をもってやっています。

このような亘理教会の支援活動を支えているいくつかの地元のグループがあります。マリアの宣教者フランシスコ修道会のシスターたち、ダルクのメンバーの皆さん、亘理カトリック保育園の先生方や園児の皆さん、青い鳥の皆さんなど、この方々のおかげで、どれほど助かっていることか！

被災地支援ボランティアでスタートしたオリーブの会は、亘理教会の宣教の場という側面を持ち始めています。オリーブの会は、地元教会の協働ボランティアなので、カリタスジャパンの支援がないけれど、その分自由な企画・運営ができます。2021年4月以降、カリタスジャパンの支援がなくなった後でも、被災地の人々の孤独に寄り添う覚悟です。これからも、全国の教会の祈りと応援をお願いいたします。





9月初旬、聖母訪問会檜葉修道院から、1通の手紙が送られてきました。内容を読んで、驚きました。「9月21日、檜葉修道院を閉鎖することになりました」、とあるではありませんか！ さっそく、お電話をし、シスターたちが、唯一空いている日として教えてくださった9月16日（水）の午後、仙台教区サポートセンターの小野寺洋一神父、濱山麻子、長谷川昌子の3人が檜葉修道院をお訪ねしました。

檜葉修道院に到着後、ご挨拶もそこそこに、まず、私たちが申し上げたことは、「修道院を閉鎖して、本部にお帰りにするのは、とても残念です。米川の時代から、福島でのお働きの時代、そして、檜葉に来られてからのご活躍とずっと一緒に、復興支援活動が続けてきたという思いがあるので、今回のニュースは、私たちにとって寝耳に水の驚きでした。これから、どうなさるのですか」ということでした。

しかし、2人のシスターたちの第一声は「私たちは檜葉修道院を閉鎖することになりましたが、決して内向きになりたくありません。被災地という声がかかれば、すぐに『はい』と言おうと思っています」という力強い言葉でした。今回が檜葉修道院での最後ということで、これまでのシスター方の歩みについて、急ぎょインタビューすることになりました。



引っ越し前の忙しい中、インタビューに応じてくださった Sr. 藤原と Sr. 松坂

カリタス石巻、米川、原町、そして檜葉町の住民として

東日本大震災直後から、日本女子修道会総長管区長会が「シスターズリレー」という企画を立ててくださり、「大地震、津波、福島原発の爆発事故という未曾有の災害を受けた仙台教区を、日本にある約100の女子修道会が一致して支援していきましょう」と呼びかけられました。

一方、聖母訪問会も、「私たちとして、何ができるだろうか」と祈りながら問い続けておられ、すぐに、この「シスターズリレー」に積極的に参加することを決断なさいました。当時、福岡の修道院に属しておられた Sr.藤原は、カリタス石巻ベースで、2011年6月に1週間、シスターズリレーのメンバーとして、ボランティアをしてくださる方々の食事のお世話や、お掃除などをしてくださいました。修道院に帰ると、シスターたちが、「どうだったの？ 被災地は？被災者は？」と矢継ぎ早に聞かれます。「私は、石巻では、実際の泥掻きなどはしませんでした。ただ、最後の日にベース長さんから日和山公園に連れて行ってもらいました。その時、お母さんと娘さんらしいお2人の方が、しゃがみ込んで手を合わせ、泣きながら祈っている娘さんの背中を一生懸命いたわるように、また慰めるように、さすっておられる姿を目にしたことを話しました。この山の

下に見えるところは、かつて、家やお店、学校など、日常生活が営まれていたところでしたが、津波と火事で、すべて流され、焼かれ、何もありませんでした。それで、質問をするシスターに、どうぞ、皆さんも、被災地に行って、見てきてくださいと申しました」と、Sr.藤原は話します。



2011年6月 日和山公園から見下ろす石巻市南浜地区

次に、Sr.藤原が関わったのは、カリタス米川ベース（現カリタス南三陸）でした。「今度は短かったのですが、2泊3日の予定でボランティアとして入りました。ここで、漁業ボランティアと農業ボランティアを体験することができました」。

漁師さんが津波被害を受け、ご自分の持ち船もなくし、網も流され、どのようにこれから生きてゆけばいいのか迷いながらも、全国から自分たちのためにボランティアさんが来てくださった、ということで、また、この地で漁師として生きていこうと勇気をもらった、と語る漁師さんの姿に心を打たれました。

こうして、「シスターズリレー」に参加したシスターたちの思いや被災地の情報を得て聖母訪問会は、2011年11月から2014年3月末まで、カリタス米川ベースに近いところに家をお借りすることができ、「米川共同体」が誕生しました。



米川共同体のシスターたち（Sr. 藤原、Sr. 大河、Sr. 山下）

シスター3人がベース長の千葉道生さんのお手伝いをしながら、交わりの時を大切にしてきました。

気仙沼教会の主任司祭をなさっていた會津隆司神父から、日本人と結婚しているフィリピン人への協力が求められました。彼女たちはカトリック信者ですが、嫁ぎ先が仏教で、なかなか教会には来ることができませんでした。私たちはタガログ語ができませんから、意思の疎通が大変難しく、初めは、なかなか応じてくださいませんでした。それで、フィリピンのシスターが加わったことにより、コミュニケーションがスムーズにできるようになり、滞日外国人のためのミサと一緒に参加し、その方々の子どもさんのためにカテケジスを月1回していました。2013年の1月6日、主のご公現の祭日に、南三陸町在住の8人の小学生が洗礼の恵みをいただくことができました。



また、月に1度ですが、米川聖マリア保育園の園児たちにお話をする機会もいただきました。クリスマスには、ご招待を受け、園児の皆さんや保護者の皆さんと、楽しいひとときを過ごしました。

米川在住のフィリピン人の11人がそれぞれお子様連れで、私たちの共同体を訪ねてくださり、各自持ち寄りで昼食会をすることもありました。そういうときは、午後2時から米川教会でミサにあずかり、その後、信徒の方々と交わるのが常でした。

私たちは、米川ベースのボランティアさんたちと、毎週3回、「お茶っこ」のお手伝いをしていました。3回とも、場所はそれぞれ違います。高齢の方が多いところでは、編み物をしたり、ある方は大人の塗り絵を楽しんだり、折り紙をする方もいらっしゃいました。若い方は、フェルトで犬や猫などの小物を作ったりしておられました。どの方も私たちとの週1回の出会いをととても楽しみに待っていてくださいました。土曜日の「お茶っこ」の所では、大人も子どもも集まって来られ、子どもたちは青年ボランティアと喜々として遊ぶ姿が印象的でした。

米川ベースでのボランティア活動の中で、初めは漁業のことは何も知らないことばかりで、驚いてばかりいました。牡蠣やわかめのお手伝いをしました。お恥ずかしい話なのですが、私ははじめから、わかめの色はお店に並べられているあの深緑で、海の底をひらひらしていたのだと思っていました。そしたら、海から引き揚げられた初めは茶色で、熱湯をかけると、あのきれいな緑色になるではありませんか。私たちがお店で買うときまでに、どれほどの手間暇をかけなければならないかを教えられ、頭が下がる思いがしました。それだけではありません。牡蠣の養殖も、その大変さに漁師さんのご苦勞を思いました。



左) 南三陸町の仮設住宅で

右) わかめの加工

私が米川にいた時、総長から、福島の前町ベースを手伝ってほしいという要望があり、2012年9月から10月の2か月間前町ベースに行きました。前町の旧保育園の建物と敷地をお借りして、前町ベースが開かれたばかりの時でした。高速バスに乗って、前町まで行きました。道路から見える家は、それぞれの家は大きく立派に見えるのですが、あけっぱなしの窓から見えるカーテンは風に吹かれてボロボロになっています。人の住んでいない家は、まるでお墓のように見えました。原発の恐ろしさを感じました。

米川と福島のこの差は何か、原発だ、と思いました。ボランティアの人も、40歳以上の人が受け入れられませんでした。

前町ベースには、池上さんというご夫婦が、ベース長として奉仕しておられました。私たちは前町ベースで生活したのですが、ボランティアの人々のお世話などをいたしました。まだ最初ですから、その日、その日のボランティアさんの入り具合などによって、私たちの休むところは毎日違っており、床に雑魚寝の日々でした。

こうして、前町での2か月が終わり、私は再び米川で活動を続け、2014年3月末に聖母訪問会米川共同体を閉じることになりました。



南相馬市内の風景  
(2014年6月)

修道会の定期総会が開かれ、シスターズリレーとその後の修道会としてのボランティア活動ではなく、「会として被災地に住みながら支援を続けよう」ということが決まりました。そして、その地域は、福島ではないか、と絞られてきました。

そのため、情報収集に1年間かけました。仙台教区の小松史朗神父が、情報収集のためなら、福島県内の情報を収集し、発信していくために設立された福島デスクに所属するのはどうかと言われ、福島デスクで、まず様子を見ようということになりました。福島デスクは、二本松教会の信徒ホールから始まりましたが、その後、聖心侍女修道会のシスター野上幸恵が責任者となり、そのもとに、佐久間香子さんと私が加わり、場所も福島市の花園町のコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の花園修道院をお借りして活動が始まりました。



福島デスクでのミーティング

ここで、忘れられない出会いをいたしました。

日本の司教団が、東日本大震災の復興支援活動のために、オールジャパンという形で支援をしてくださっていたのですが、その一環として、1年に1度、各教区の支援担当司祭、信徒たちが、被災地をベースの活動を視察しながらも、全体的な視察旅行を企画・実施なさっていました。その年は、郡山教会に全員が集まり、福島で実際の活動をなさっている方々がお話なさるパネルディスカッションがあり、その準備にかかわりました。

そのパネラーの一人に金澤弘子さんがいらっしゃいました。「今こそ真剣に祈り、被災地に命をかけなければなりません」と強くおっしゃいました。総長もその言葉を聞いていました。金澤さんは、古民家を買取り、福島県鮫川村に移築し、「知足庵」と命名し、そこに来る人の話を聞いたりしておられる。その「知足庵」開所式に参加し、金澤さんと話し、彼女の福島への思い、命をかける思いに出会いました。



知足庵にて 金澤さんとともに



## 家探しから始まり、檜葉へ

結局、「福島デスク」には、10か月おり、その年の12月に退去しました。本部に戻り、審議し、「福島に入り、創立者のような生き方をしよう」と決め、希望者を募りました。4人の希望者が名乗りをあげ2015年4月から4人が加わりました。

住む家を探さなければなりません、知り合いもないので、いわき教会の主任司祭チェスワフ神父様にお話しました。すると、湯本教会に2015年4月から10月までいいといわれ、その間家探しをすることになりました。いわき教会の信者さんのつてで、檜葉町の家を紹介していただき、ここが、駅と役場に近いので、お借りすることにいたしました。

檜葉は2015年9月、避難指示が解除され、それまでいわき市に仮役場を造っていたのですが、11月1日に檜葉に戻り、役場を開けるとのことでした。それに合わせて、私たちの修道院開設も11月1日にしました。ボランティアではなく、そこに住んで、活動するのですから、まず、住民票をもって、4人で役場に行きました。役場の人「へー」と驚き、「介護保険料が高いですよ。いいんですね」と念を押されました。



上：檜葉修道院 開設のメンバー

(Sr. 松下、Sr. 松坂、Sr. 藤原、Sr. 山口)

右：2015年、修道院開設のころの檜葉町



檜葉に住んで、最初のうちは驚くことばかりでした。街灯が一本も立っていないのです。夕方になると真っ暗です。役場に、「街灯がないので、困ります。つけていただけませんか」と申し出ると、「ちょっと待ってください。今、順々に立てているところですから」という返事。やっと街灯が立つと、東京でも、地方都市でも、街灯に光を慕って虫が来るものですが、虫が一匹も来ないのが不気味でした。除染ということで、草や土も一緒に、積み上げられている黒いトン袋に全部入れられ、虫もいなくなったという事実ショックを受けました。こんな風に、すべての命が失われたのだと思いました。いくら自然が美しいように見えるところでも、そうなのだと感じました。

生活の面では、どうなるかと心配していたのですが、役場の下の方に、仮設のスーパーがあったので、便利で助かりました。

私たちは、湯本教会にいた時から、檜葉の方が住んでいた、いわき市中央台の仮設住宅に「お茶っこ」に行っていました。これは、さいたま教区の行っていた支援活動に協力する活動でした。カリタスさいたまのベース長は朝尾光二さんで、私服でお茶っこに行っていました。その朝尾さんが、今度は「檜葉の町に住むのですから、修道服になっていいのではありませんか」、と言われ2016年のお正月のお茶っこから修道服になりました。最初心配していたにもかかわらず、仮設訪問では、何の問題もありませんでした。仮設の人々は喜んでくださり、役場の人とももっと親しくなりました。

檜葉役場のOBたちが、「檜葉未来」というグループを作り上げました。その運動の1つに6号線沿いの花植え運動があり、その運動に参加しました。その責任者の方に、朝尾さんが見つないでくださって、親しくなりました。

いわき市の仮設に住む檜葉の人の中に、町長さんの親戚の人がいました。檜葉町に住むようになった時、町長さんが訪ねてきてくださり、親しくなりました。

いわき市に避難なさっていた檜葉町の皆さんと仮設住宅から復興住宅へ移った後も  
かわり続けてきた

檜葉はとてもいい町で、住みやすい環境でした。ここに住んでいて、嫌な思いをしたことは一つもありませんでした。しかし、最初は4人の共同体でしたが、そのうちの1人が90代の高齢者で、インフルエンザにかかり、本部に戻らざるを得ませんでした。仮設住宅の「お茶っこ」に行かない日は、畑仕事をしました。夏の水やりが大変でした。

檜葉の町おこしとして、「藍染めの会」があり、最初から、それに入っていたのですが、その活動は、商品化して売り出すことを目標にしていました。種植えからはじまる本格的なもので、体力的についていけないので、それはやめました。

社協に集まって行われている「リハビリ体操」、月に1度の「絵手紙」などは続けています。



左：檜葉町の皆さんと

右：檜葉町の広報誌に「移住者」として紹介された



2018年7月、原発事故の対応拠点となっていたJヴィレッジが、スポーツ施設として再開することになり、オープン行事の2日間、だれか救護班になってほしいと、ボランティア募集が広報のお知らせ欄に載っていました。それで、私は看護師の資格を持っているので、応募しました。2人のはずが、私一人しかいませんでした。救護班のネームプレートをぶら下げて、その2日間、私は、おかげ様で、Jヴィレッジを隅から隅まで見る事ができました。

それがご縁で、檜葉唯一の特別養護老人ホーム「リリー園」に、毎週1回ボランティアに行くことになりました。ここには、檜葉だけでなく、広野、富岡の高齢者、約50人の方がおられました。私は、すぐに、5人の方の係になって、その5人のマッサージをしてください、と言われました。

5人の方は、皆さん発語ができない方ばかりでした。これまで看護師として病人のお世話をしてきましたが、病気の回復のための働きでした。話すことができない人にどう接すればいいのか戸惑いま



した。毎週、5人の人に手足のマッサージをしながら、イエス様に祈っていました。「イエス様、この人たちにどう接すればいいのか教えてください。喜んでいるのかも分からないのです」と祈っていると、「何を考えているのか。この人たちの機能回復を考えなくてよいのだ。友達になってあげればいいんだよ。それが大切なことなんだよ」と、イエス様が教えてくださいました。ハッとしました。その時から、私の奉仕も変わってきました。アロマ・オイルを垂らしたお湯で、手足をマッサージしました。お天気のいい日は、外に連れ出して、童謡を歌ってあげました。すると、いままで全然声も出さなかった人たちが、言葉ははっきりしませんが、「あー、あー」と声を出して、歌ってくださるようになったのです。そして、お部屋に帰るため車いすを押そうとすると、細い手を出して、私の手を握ってうれしそうに、握手してくださったのです。私はイエス様に「イエス様、ありがとうございます！ あなたのおっしゃったことは、こういうことだったのですね」と感謝しました。私は、この年になるまで、このような体験をしたことがありませんでした。

新型コロナウイルスがはやりだしてから、そのボランティア活動もできなくなりました。今でも心に残っている人々です。



シスター松坂のお話は、編集部がまとめさせていただきました。

シスター松坂が石巻ベースにかかわったのは、2011年5月の連休中のことでした。3月11日からまだ2か月足らずの時です。石巻ベースもまだ、カトリック石巻教会に置かれていた時でした。カトリック石巻教会と同じ敷地に建っている石巻カトリック幼稚園は、高台にあったため、津波の被害は受けませんでした。坂を下っていくと、周囲は津波の傷跡が生々しく残っていました。

石巻ベースのすぐ近くに門脇中学校があり、その体育館が緊急避難所となっていました。当時、いちばん大勢の方が避難なさっている避難所と言われていました。お年寄りから子どもまで、大勢の方がいらっしゃいました。

石巻ベースにも、多くの若いボランティアの方が来てくださっていました。毎日、ベースから被災地の片づけなどの行き帰りに、自然にそこに避難している人と知り合い、大変な寒さの中ですが、「火が使えないので、温かいお茶が飲みたい、コーヒーも飲みたい、とみんなが思っている」こと「配られるお弁当は、冷たくなっている」ことなどを話してくださいました。リーダーが避難所の責任者と話し合ったのですが、「火事になったら大変なことになるので、火気厳禁にせざるを得ない」ということで、体育館の前にテントを張り、大きな寸胴鍋でお湯を沸かし、皆さんが持って来られるポットやお茶碗にお湯をさしあげる活動が始まりました。これは、この避難所の方々が、方々の仮設住宅に引っ越されるまで続けました。大変喜ばれた奉仕活動でした。



上：門脇中学校でのお湯出し

右：東松島市の仮設住宅集会所でのお茶っこ

一方で、仮設住宅の集会所で「お茶っこ」も始めました。最初は手作業として、ビーズ手芸をしていたのですが、手芸が苦手な人もいらっしやることから、次第に「お茶っこ」だけをするように変わっていききました。

ベースでのボランティアとスタッフの食事作りは、地元の人に手伝ってもらうようになりました。

このほかにも、門脇中学校の美術部の生徒さんたちにはベースの壁に掛ける大きな絵を描いていただきました。

こうして、振り返ってみると、これらの活動は、石巻の地元の人々とのつながりを作っていく大事な時期だったのだと思います。

現在の石巻ベースに移転してからのことになりますが、ベースを他団体の方に貸すということも始まりました。これは、他団体の方とのつながりにもなりました。「手芸を教えてください」グループ「布草履作りを教えてください」など。

いろいろな方、団体の方のお力によって、礎を築いてくださったのですが、その大切な時期に私が関わっていたということは、うれしいですし、誇りに思います。



2012年1月28日、現在の石巻ベースのオープンハウスの日

当時のスタッフ、ボランティアとともに（後列右から一人目がSr. 松坂）

## マリアの宣教者フランシスコ修道会、亘理修道院閉鎖

最初、原町に住み、次いで、宮城県亘理市に修道院を開き、その二か所の修道院を亘理の方に合併させ、常時、3人～4人のメンバーで、被災地の復興支援活動に大きな力を発揮してくださっていましたが、今年の夏に続いた大雨で、借家が雨漏りし始めたことから、大家さんが、家屋の解体を決定されたため、11月10日に閉鎖されました。彼女たちも、「これで私たちの働きが終わったのではありませんよ」とおっしゃっています。